

図書室通信

令和7年2月10日発行
木更津市立木更津第一中学校
文責 信田夕美子
2025年・早春号

春分が過ぎ暦の上では春になりましたが、まだまだ寒い日が続いています。それでも梅の花が咲いているのを見かけるようになりました。みなさんはこの一年間でどれくらい本を読み、図書室を活用しましたか？今回は図書館や書店を舞台にした本を紹介します。物語の中の本との出会いや、人との出会い、おいしいものとの出会いを楽しんでくださいね！

☆「虹色図書館 司書先輩と見習いのぼく」 櫻井とりお・著

高校を卒業して、小さいころから好きだった図書館で働き始めた犬上健介。基本は人見知りで内気。しっかり者の青柳先輩、破天荒な霜月先輩の背中を追いかけて、立派な図書館員を目指すけれど、初めての電話、お客さんの質問、読み聞かせ、と毎日大変。そんなある日、事件が？

☆「未来の自分に出会える古書店」 斎藤孝・著

兄のあだ名は「ゴッホ」、高校2年生。ユニークでマイペース、絵が好き。弟は「メッシ」と呼ばれる中学2年生、将来の夢はJリーガー。二人が暮らす街に古本屋ができた。二人はこのお店に顔を出すようになり、店長と親しくなる。言葉や書物に関する著書の多い斎藤孝さんがストーリー仕立てで本を紹介していく。

☆「栞（しおり）と嘘の季節」 米澤穂信・作

高校で図書委員を務める堀川次郎と松倉詩門は、図書室の返却本の中に押し花の栞が挟まっているのに気づく。小さくてかわいらしいその花は猛毒のトリカブトだった。二人は持ち主を探し始めたのだが、なんと学校の中で栽培されているのを発見。はたして誰が何のために？

☆「図書館のお夜食」 原田ひ香・作

東北の書店に勤めていたがうまくいかず、仕事を辞めようかと思っていた乙葉は、SNS でみつけた東京の郊外にある「夜の図書館」で働くことにする。そこは普通の図書館と違い、開館時間は夕方7時～12時までで、亡くなった作家の蔵書が集められていた。いわば本の博物館だった。乙葉はこの図書館で予想外の事件に遭遇しながら、働くことについて考えていく。

本の中で紹介されたおいしいものが出てきます！

